



TITLE:

# サル類保健飼育管理施設(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

竹中, 修; 松林, 清明; 後藤, 俊二; 松林, 伸子

---

CITATION:

竹中, 修 ...[et al]. サル類保健飼育管理施設(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1983, 12: 25-27

ISSUE DATE:

1983-01-19

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163063>

RIGHT:

## 幸島野外観察施設

岩本光雄（施設長・兼）

森 明雄<sup>1)</sup>・渡辺邦夫

前年度（昭和55年度）末完成の研究棟増築部分の活用を含め、施設の運営は順調に進められた。昭和56年度に本施設を利用した研究者は、宮藤浩子共同利用研究員のほか、延べ239人に達し、57年1月には、幸島ニホンザルを一時的につかまえて身体面に関する調査を行ない（後述）、一部のサルには、顔に個体識別用の入れずみを施した。

ニホンザル幸島群のポピュレーションは、昭和57年4月1日現在で主群70頭、"マキ"グループ12頭、ソリタリー10頭の計92頭である。56年度中の出産は12例に達したが、うち1例は死産、4例は生後に死亡した。群れの状況としては、浜に放棄された魚を食べるサルが見かけられるようになったことが注目される。これまでのところ、魚を食べるのはサツキほかのオトナのサル5頭であり、これらサルと順位ないし血縁性との関係はないようである。

なお従来、幸島は干潮時に市木海岸と広く陸つづきになることが多く、観光客の多い時期にはサルが陸地がわへあふれでるおそれがあったが、56年度中はいわゆる島が切れた状態が続き、サルの群れにその意味での落ち着きが見られた。そこで57年1月20日前後の数日間をえらび、山中でサルを一時的につかまえ、生体計測、血液資料の採取など、身体面に関する調査を行った。

昭和56年10月1日づけで、多年にわたり当施設助手の任に当たってきた森明雄助手が生活史研究部門へ移り、かわって同57年1月16日づけで、渡辺邦夫が当施設助手として着任した。

### 研 究 概 要

#### 1) 幸島のサルの生態学的社会的研究

森 明雄・渡辺邦夫・

三戸サツエ・山口直嗣・

冠地富士男

前年度からの継続として、ポピュレーション動態に関する諸資料を収集し、また定期的に、ほぼ全個体の体重を測定した。

1) 昭和56年10月1日づけで生活史研究部門に配置換え

## 2) 類人猿の社会学的生態学的研究

森 明雄

昭和54年より55年にわたって行ったアフリカでの現地調査資料を中心として、研究のとりまとめを進めた。

## サル類保健飼育管理施設

竹中修(兼)・松林清明

後藤俊二・松林伸子<sup>1)</sup>

繁殖コロニーにおける飼育を昭和55年夏に開始し、初年度の昭和56年春～夏にアカゲザル計33頭（出産率73%：出産数を出産可能な♀の頭数で割った数）、ニホンザル計5頭（出産率45%）の出産をみた。アカゲザルの母群構成がやや困難で、とくに中国産アカゲザルの母群数はまだ少いため、利用が可能な段階にはまだ2～3年を要するものの、比較的多数のサルで母群を構成出来たインド群は昭和57年から供給の開始が可能と考えている。

飼育中のサルの繁殖についてはチンパンジーの人工授精の成功があげられよう。これは所内における本格的なチンパンジー研究のスタートに対応し、昭和54年より♂1頭・♀2頭でグループ飼育を行い、またニホンモンキーセンターからオスを2度にわたって借りるなど、繁殖に努めたが、いずれも交尾行動を見ることが出来なかったものである。昭和56年春～夏に人工授精を試み、昭和57年3月

昭和56年度サル施設経費概算	
項 目	金額（千円）
備 品 費	4,693
サ ル 購 入 費	1,678
サ ル 飼 料 購 入 費	10,313
薬 品 代	1,040
消 耗 品 費	2,153
人 件 費	8,177
補修・改造等工事費	1,115
ケ ー ジ 購 入 費	320
雑 費	340
計	29,829

1) 教務職員

7日にメスのボボ（母親はプチ）、同5月18日にオスのレオ（母親はレイコ）が誕生した。プチは子供を養育しようとしなかったので人工哺育で育てている。レイコの方は、最初子供の抱き方に不安定さが見られたが、飼育技術員の調教の努力もあって現在独力で哺育を行っている。また稀少種としてはワオキツネザルも一頭誕生を見た。

人事では、昭和48年2月より当施設助教授であった千葉敏郎が、昭和57年3月16日付で岐阜大学教授（農学部獣医学科）に転出した。また、竹中修（生化学部門）が昭和57年4月1日より2年間施設長を兼任することとなった。

## 研究概要

- 1) 雄ニホンザル生殖機能の成長と季節的变化に関する形態学的ならびに生理学的研究

松林清明

生殖器構造、テストステロン濃度、精液性状、組織化学などの検索を行い、性機能の年令的・季節的变化の総合的評価を行った。

- 2) サル類の人工授精に関する研究

松林清明・熊崎清則

釜中慶朗

チンパンジーについて電気刺激による採精法を応用して、2頭のメスの性皮腫脹を指標とした授精を行い、2頭ともに妊娠・出産を得た。

## 1981年度（昭56）サル動態報告書

区 分 種 名	入 荷			出 産	管 理 換 え	実 験 殺	事 故 死	管 理 失 宜	死 因					
	校 費	科 研 費	寄 附						消 化 器 系	呼 吸 器 系	敗 血 症	寄 生 虫 症	そ の 他	不 明
コ モ ン ツ パ イ				9			1			1				7
ワ タ ボ ウ シ タ マ リ ン				3			2							
シ ル バ ー マ ー モ セ ッ ト				1						1	1			
ヨ ザ ル				1										
ニ ホ ン ザ ル			4	32		17		2	2	4	1		2	1
ヤ ク ニ ホ ン ザ ル				4										
ア カ ゲ ザ ル	20	10	1	39		18	4	2	9	5				4
カ ニ ク イ ザ ル	7		1	16	5	4	1		2	3(2)				
タ イ ワ ン ザ ル	3			2		4			4	2				
ベ ニ ガ オ ザ ル						1								
ボ ン ネ ッ ト ザ ル						1								
M. ff × Mm						4		3						
マ ン ト ヒ ヒ				1										
ゲ ラ ダ ヒ ヒ												1		
チ ン パ ン ジ ー				1										
計	30	10	6						17	16(2)	2	1	2	12
合 計		46		109	5	49	8	7			50 (2)			

注) ( ) 印、検疫中死亡内数

総増加数－総減少数＝差引頭数

155 - 119 = 36 頭増加

3) ニホンザルの成長に伴う眼内視所見の推移  
後藤俊二

幼児期の人工哺育を主な対象として、単色光撮影法等による眼底像及び前眼部透光体の屈折率の変化についての継続観察を行っている。

4) ニホンザル四肢奇形の原因探究

後藤俊二

血液検査を主とした臨床病理学的検討を共同研究の一環として進めている。今年度は新たに幸島群が調査対象に加えられた。

1981年度(昭56)末飼育頭数調べ

種 名	頭 数
コ モ ン ツ パ イ	9
ワ オ キ ツ ネ ザ ル	3
ス ロ ー ロ リ ス	2
オ オ ギ ャ ラ ゴ	5
ワ タ ボ ウ シ タ マ リ ン	12
シ ル バ ー マ ー モ セ ッ ト	4
ヨ ザ ル	7
リ ス ザ ル	3
ノ ド ジ ロ オ マ キ ザ ル	1
フ サ オ マ キ ザ ル	2
チュウベイクモザル	1
ミ ド リ ザ ル	3
パ タ ス ザ ル	2
ニ ホ ン ザ ル	283
ヤ ク ニ ホ ン ザ ル	23
ア カ ゲ ザ ル	174
タ イ ワ ン ザ ル	13
ブ タ オ ザ ル	4
ベ ニ ガ オ ザ ル	6
ボ ン ネ ッ ト ザ ル	10
カ ニ ク イ ザ ル	36
ア ッ サ ム ザ ル	5
M. ff × M f y	2
M. ff × M m	6
E p × C a	2
マ ン ト ヒ ヒ	2
ゲ ラ ダ ヒ ヒ	1
シ ロ テ テ ナ ガ ザ ル	2
ア ジ ル テ ナ ガ ザ ル	1
チ ン パ ン ジ ー	8
計	632

論 文

- 1) Matsubayashi, K. (1982): Comparison of two methods of electroejaculation in Japanese monkey (*Macaca fuscata*). Exp. Anim. 31-1, 1-6.

研究報告・その他

- 1) 松林清明・町田昌昭・和 秀雄・千葉敏郎・東 滋・大沢 済(1981): 幸島サル群の腸内寄生虫——感染状況の調査と駆除の試み, 科研費調査報告
- 2) 松林清明(1982): カニクイザルの赤痢を追う インドネシア調査報告——, モンキー 181, 28-33.
- 3) Matsubayashi, K., D. Sajuthi (1982): Microbiological and clinical examinations of cynomolgus monkeys in Indonesia. Kyoto University Overseas Report of studies on Indonesian Macaque I, 47-56.

学 会 発 表

- 1) 松林清明・望月公子(1982): ニホンザル雄性生殖器官の成長と季節的变化。第93回日本獣医学会

ニホンザル研究林

研究林実行委員会

1. 下北研究林

下北半島北西部のニホンザル生息地では、例年の通り、主として冬季の観察条件の良い時期に、群れの遊動の継続追跡観察を行った。

西南部に生息する群れに関しては、分裂後の経過を追うとともに、餌づけ群の生態管理に必要な基礎調査を行ってきた。

2. 上信越研究林

雑魚川流域の冬の糞内容分析研究が行われた。その中で、糞に含まれる繊維によって食物の樹種分類が可能になりつつある。又、横湯川流域の